芭蕉元禄事業　奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成三十年九月度　入選句（投稿総数二千四百二十三句・一般投句数六百十句）

選者　度会さち子

特選

秋夕焼影と走りし球児たち　大垣市　神野武彦

夕方は影がのびる。甲子園をめざして今日も練習に励む球児たち。掛け声やバットの音が夕空に響く。守備にかがみ、ボールを追い交差する彼らの長い影も、やがて薄れ夕暮れとなる。見上げれば、彼等の熱情に染まったような、赤く濃い秋の夕焼け。束の間の夕焼け後、グランドを去る球児たちの背のくろぐろとしたシルエット。秋夕焼けと影の取り合わせが、青春の甘さと愛おしさを誘う。

妻でなく母でもなくてサングラス　大垣市　片山洋紅

サングラスは日差しから目を守る、目元の皺を隠す、表情を読まれたくない時などに使用するが、サングラスをかけると、なぜかいつもと違った自分になれるような気がする。特に黒いサングラスは。女性たちはどこか、「母であること」「妻であること」にとらわれている。サングラスをかければ、誰のものではない、一人の私になれる。もしかしてこの句は、それを選ばなかった自立した女性像か。サングラスの下の思いは？

雨上がるけはひや合歓の花ゆれて　多治見市　曲直瀬弘子

渓谷に沿って、合歓の花咲く途が続く。空がいくぶん明るくなり、雨足もやさしくなった。どうやら雨があがるらしい。ふと合歓の花がゆれた。雨のしづくが、合歓の葉末にこぼれるのだろう。ひそやかな音は空気をふるわし、合歓の花が揺れる。ウォーキングの途中なのだろうか、川音も軽やかに聞こえる。合歓の花も雨が上がるのを喜んでいるようだ。空も一段と明るくなった。そして雨が止んだ。繊細な佳句。

秀逸

除幕まつ句碑のささやき秋の寺　養老郡養老町　田中秀草

一山に供華の鬼灯明りかな　福井県敦賀市　山田美千代

竹春の日をちりばめし切通し　大垣市　三輪千芽

初版本曽良の字やさし秋じめり　可児市　加藤美代子

きのふにはなき風のおと秋立ちぬ　岐阜市　花川和久

行水の小さき手より虹うまれ　京都府宇治市　椎原園美

棕櫚の葉のときをり鳴って夏の星　安八郡神戸町　後藤和朗

花野より向かう花野へ渡し舟　大垣市　田中雅子

灯ともして田植終りし村静か　安八郡神戸町　高橋日出美

山が生み山に消え去る秋の紅　京都府京都市　石田一美

入選

青空の深き傷痕原爆忌　養老郡養老町　田中紫香

踊り下駄鳴らすピアスの美青年　大垣市　大杉すみゑ

盆の風夜の座敷は広々と　大垣市　多賀英華

稲妻や垂直線に空気割く　海津市　横井美圭

百日紅古刹に父母の寄進札　不破郡垂井町　児玉信子

芭蕉の句空らんじて知る秋の旅　多治見市　窪田甫子

甲子園夢の高さに雲の峰　岐阜市　花川和久

ビー玉を覗いてみれば野分雲　各務原市　中里香苗

遣り水に口開けてくる蜥蜴の子　安八郡神戸町　後藤和朗

夕焼中少女の耳の染まりけり　不破郡垂井町　北村廣美

入選

飛行機雲追うて八月十五日　愛知県岡崎市　千石立子

向日葵は散ること知らず垂れてをり　大垣市　多賀照子

道標の梵字浮き立つ秋暑かな　大垣市　森川きよ子

紫陽花や共に気を抜く午後三時　大垣市　後藤摩弓

定紋も虫喰ふてあり盆灯籠　不破郡垂井町　川瀬慶泉

決心の揺らぐ隙なきいわし雲　鳥取県岩美郡　都忘れ

すれ違ひざまに涼しき京言葉　愛知県豊田市　城山憲三

迎え火も送り火もまた我一人　福岡県田川郡　成松義紀

残暑なほビルの谷間の風重し　神奈川県横浜市　龍野ひろし

選者吟

葛匂ふ傀儡の村の橋をすぎ　さち子